日本語版 Sensation-Seeking Scale の作成

関西学院大学 寺 崎 正 治
兵庫教育大学 塩 見 邦 雄
近 畿 大 学 岸 本 陽 一
関 西 大 学 平 岡 清 志

A Japanese version of the Sensation-Seeking Scale

Masaharu Terasaki (*Department of Psychology, Kwansei Gakuin University, Nishinomiya, Hyogo 662*), Kunio Shiomi (*Hyogo University of Teacher Education, Kato-gun, Hyogo 673-14*), Youityi Kishimoto (*Kinki University, Higashi Osaka, Osaka 577*) and Kiyoshi Hiraoka (*Kansai University, Suita, Osaka 564*)

A Japanese version of the Sensation-Seeking Scale was developed based on Zuckerman's SSS Form IV. Items of Zuckerman's Form IV were translated into Japanese and were administered to Japanese undergraduates (458 males and 431 females). The results were factor-analysed to select items for the scales. Four factors were originally postulated, but the results were more easily interpretable when five factors were extracted, especially in the female sample. This fifth factor was regarding marihuana use and sexual behavior. In order to match the structure of the scales for both males and females, items highly loaded with this factor were eliminated and the results for the remaining items were again factor-analysed. Then the following four scales were constructed: Thrill and Adventure Seeking (TAS), Experience Seeking (ES), Disinhibition (Dis), and Boredom Susceptibility (BS). Items of TAS scale were highly consistent with Zuckerman's TAS items of Form V. But items of ES, Dis and BS scales were different from those of Zuckerman's and the scales turned out to be those uniquely constructed from Form IV. The test-retest reliabilities (test-retest interval was three months) of the total SSS were .87 and .73 in males and females, respectively. TAS, ES and Dis reliabilities were ranging from .74 to .86 for males, and .74 to .82 for females. However, males' and females' BS were less reliable (.54 and .48 respectively). Internal consistency reliabilities (KR-20) of the total SSS were .75 for males and .65 for females. TAS, ES and Dis reliabilities were ranging from .56 to .67 for males, and .47 to .61 for females. But the BS scale showed poor reliability (.29 for both males and females).

Key words: Sensation-Seeking Scale, Japanese version, factor analysis, content validity, reliability.

Sensation-Seeking Scale (SSS) は、Zuckerman 等が“刺激作用の最適水準” (optimal level of stimulation) という構成概念に基づき、OLS の個人差を測定するための道具として開発した質問紙である (Zuckerman, 1979)。sensation seeking は、“新奇で変化する感覚や経験に対する要求についての、またそのような経験を得るためには少々の社会的リスクや身体的リスクをいとわないパーソナリティ特性である”として定義されている (Zuckerman, 1979, p.10)。

最初 SSS は、Zuckerman, Kolin, Price, & Zoob (1964) によって標準化が行われ (SSS Form I, II), 主に感覚遮断実験における反応の個人差を予測するために用いられた (Zuckerman, 1979, p.91)。その時点にお

いては、SSS は sensation seeking に関する一般的尺度からのみ構成されていた。その後、Farley (1967) や Zuckerman & Link (1968) は sensation seeking がいくつかの因子から成り立っている可能性を示唆した。因子分析の結果、4つの因子が見い出され、この時点で SSS に大幅な改訂が加えられた (Zuckerman, 1971)。現在の SSS の基本的な骨格は、SSS Form IV において完成している。そこにおいては、従来からの一般尺度 (GS scale) に加えて、新たに因子分析の結果に基づいた4つの尺度がつけ加えられている。これらの尺度は Thrill and Adventure Seeking (TAS), Experience Seeking (ES), Disinhibition (Dis), Boredom Susceptibility (BS) と名づけられた。しかし、Form IV にお

ける従来からの GS 尺度は、新たに同定された 4 因子を均等に反映していないことや、さらにこのテストをイギリスとアメリカという異なる文化圏の人々に等しく使用出来るように下位尺度項目が吟味された。(Zuckerman, Eysenck, & Eysenck, 1978). その結果, TAS, ES, Dis, BS の各尺度 10 項目ずつからなる, Form IV の短縮版である Form V がつくられた (Zuckerman et al., 1978).

本研究の目的は, Form IV を元にして Form V に準ずる SSS の日本語版を作成することである. 日本語への翻訳の最初の試みは, 大久保 (1972) が SSS form II を用いて行っているが, そこで抽出された一般因子とイギリス人およびアメリカ人サンプルから抽出された一般因子との因子間の相関は .35 と低いものであった (Zuckerman et al., 1978). このことは翻訳に伴う項目内容の意味の変化も一因であろうが, 西欧との文化差をも反映している可能性が考えられる. そこで, 日本語版の作成に当たっては, 日本人サンプルから抽出される因子構造について検討しその結果を元にして尺度項目を決定していくことにした.

調 査 1

目 的

Zuckerman et al. (1978) の SSS Form IV を日本語に翻訳し, 日本人サンプルにおける因子構造を明らかにする. さらに因子分析の結果を元にして, 日本語版における下位尺度項目を決定する.

方 法

日本語への翻訳: SSS Form IV は, 72 の項目から成り立っている. 各項目には A と B の 2 種類の内容の文章があり, いずれか該当する一方を強制選択させる形式をとっている.

翻訳に際しては, 文章の意味内容がなるべく原文と等価になるように配慮した. 従って, 表現の細部に関しては原文と一致しないものもいくつかみられる. 今回の分析に至るまでに, 予備的にテストを施行し, 各項目への応答内容や因子分析の結果を考慮に入れながら訳文を吟味し, 表現を改めた.

被験者 男子大学生 458 名 (平均年齢 18.8 歳, SD 1.17) および女子大学生と女子短大生 431 名 (平均年齢 18.6 歳, SD 0.61) の計 889 名を用いた.

手続き 資料の収集は, 1984 年 4 月から 1985 年 5 月にかけて, 大学の授業時間の一部を利用して行った. 資料の分析には, 因子分析法を用いた. まず, 72 の質問項目への反応を元に 72×72 の 4 分割相関係数マトリクスを算出し, SPSS を用い主因子解による因子分解を行い, varimax 回転を行った. この分析は男女別および男女込みで行われた.

Table 1
Agreement between heavily loaded items
in the Japanese version of the SSS and
the items in the subscales of Form IV

Scale	Number of items	Male	Female
TAS	14	13/14	12/14
ES	18	11/18	8/18
Dis	14	8/14	8/14
BS	18	4/18	3/18

結 果

Zuckerman (1971) の Form IV においては, 4 つの因子が同定されている. そこで, 我々も 4 因子を仮定し, 因子の抽出を行った. この結果を元に, Zuckerman の Form IV における 4 つの下位尺度項目との対応を比較した. Table 1 は .30 以上の負荷量を示した項目に限定して, 原版における下位尺度項目との一致度を示したものである. これによると, TAS 項目の一致度は男女共高いが, ES, Dis, BS に関しては一致度が低いことがわかる. 特に BS においては, ほとんど対応が認められなかった.

そこで, 一応 4 因子の仮定から離れ, 我々の用いたサンプルにおいて有意な因子構造を探ることにした. その結果, 因子の抽出を 5 因子までとした場合に, 最も解釈が容易であった. 5 因子中, 4 因子は概念的には彼等の 4 因子と一致するものであった. 残りの 1 因子は, 原版における ES, Dis 尺度項目からのもので, その内容は主にマリファナ等の薬物の使用やセックス, ギャンブルに関連したものであった. さらに, この因子は女子に特有のものであった. おそらく, これらの項目に対しては日本人特に女性の場合には異なった反応をした結果であろうと推測される. テストの一般性という観点からテストの構造が男女によって異なることは好ましいとは言えない. さらに, 社会文化的な観点からもこれらの内容は日本においてはタブー視されがちであり, 日本版からこれらの項目を除外することにした.

この 1 因子を除き, 他の 4 つの因子に負荷の高かった項目をそれぞれ 10 ないし 12 項目ずつ選択し, 計 45 項目に関して再び因子分析を行い 4 因子まで抽出した. これらの 4 因子に負荷する項目の内, 原則として .30 以上の負荷量を有する項目に関して, 負荷量の高いものから順に 10 項目ずつ, ただし BS 尺度に関しては 8 項目選択した. しかし, 項目内容が極めて似かよっているものは, どちらか一方を採用した. また, 男女共に負荷している項目を優先した. その結果, Table 2 に示すように, TAS 10 項目, ES 10 項目, Dis 10 項目, BS 8 項目からなる日本語版 SSS を決定した. また, Table 2 に

Table 2
Loadings of items selected for the Japanese version of the Sensation-Seeking Scale

No.	Item	Loading			Scale of Form V
		Whole	Male	Female	
Thrill and Adventure Seeking (TAS)					
1	A. 水上スキーのようなスポーツをしてみたい。 B. 水上スキーのようなスポーツをしてみたいとは思いません。	.85	.85	.77	TAS
21	A. パラシュート降下を一度やってみたい。 B. パラシュート降下などやりたくありません。	.71	.77	.68	TAS
5	A. サーフィン（波のり）をしてみたい。 B. サーフィンをしてみたいとは思いません。	.69	.67	.69	TAS
25	A. 私は高い飛び込み台から飛び込むのが好きです。 B. 私は高い飛び込み台に立ったときの感じが嫌いです。	.65	.69	.73	TAS
9	A. スキューバーダイビング（アクアラングをつけて潜水する）をやってみたい。 B. スキューバーダイビングよりもふつうに泳ぐ方が好きです。	.60	.59	.61	TAS
29	A. スキーで急斜面をスピードを出して滑降するのは松葉杖のやっかいになるのがおち（つね）です。 B. 私はスキーで急斜面をスピードを出して滑るのが好きです。	.58	.60	.55	TAS
13	A. 飛行機の操縦をしたいとは思いません。 B. 飛行機の操縦をしたいと思います。	.54	.59	.58	TAS
33	A. ジェットコースターのような乗り物には乗りたくありません。 B. スリルを味わうためにジェットコースターのような乗り物に乗ってみたい。	.49	.51	.51	
17	A. 海や湖に行けば岸辺で遊ぶのが好きです。 B. 私は時々岸から離れて遠くまで泳いで行きたくなります。	.47	.47	.46	
36	A. 小さなヨットで遠洋航海するのは無謀なことです。 B. 私は小さくても航海に耐えられるヨットならそのヨットで遠洋航海をしてみたいと思います。	.44	.52	.36	TAS
Experience Seeking (ES)					
3	A. 友人としては現実的な人が好きです。 B. 芸術家やヒッピーのように現実離れた人が好きです。	.64	.61	.67	ES
23	A. 安全で心配のない幸福な理想社会で暮らしてみたいと思います。 B. 不安定だが変化に富んだ社会に暮らす方が良かったと思います。	.63	.60	.75	
7	A. 旅行するとすれば先進国の方を選びたい。 B. 旅行するとすればアマゾンの奥地のような未開地へ旅行してみたい。	.60	.60	.53	
27	A. 私は登山家になりたいと思うことがよくあります。 B. 私は命がけで登山する人の心がわかりません。	.53	.49	.41	TAS
11	A. 分別（ふんべつ）のある人は危険な行為を避けると思います。 B. 私は時々冒険をしたくなります。	.50	.59	.52	TAS
31	A. 行き先や時刻を決めずに無計画に旅行するのが好きです。 B. 旅行する時は行き先や時刻について慎重に計画します。	.48	.47	.47	ES
15	A. よく知らない所でも一人でぶらぶらするのが好きです。 B. よく知らない所は一人では不安です。	.46	.45	.38	ES
35	A. 白熱した議論は好きではありません。 B. 白熱した知的な議論が好きです。	.46	.56	.33	
19	A. 私は自分と意見が同じ人よりも異なる人と議論をしたい。 B. 私は自分と意見が異なる人と議論をしたくありません。	.41	.43	.35	
38	A. 同性愛（男であれ女であれ）の人に興味があります。 B. 同性愛の疑いのある人には興味がありません。	.40	.34	.49	ES

Table 2 (Continued)

No.	Item	Loading			Scale of Form V
		Whole	Male	Female	
Disinhibition (Dis)					
2	A. 酒を飲みすぎて大声を出しばかり騒ぎをするようなパーティーは嫌いです。				
	B. 酒が十分あって思い切り騒げるようなパーティーが好きです。	.70	.69	.67	Dis
22	A. 私は静かで穏やかな人の方が好きです。				
	B. 私は落ち着きがなくても感情表現の豊かな人の方が好きです。	.60	.57	.56	
6	A. 一般的な服装をするのが良いと思います。				
	B. 少々奇妙に見えても自分の好みに合わせた服装をするべきだと思います。	.49	.47	.36	ES
26	A. 人前で卑わいな言葉を使うのは下品だと思います。				
	B. 私はときには卑わいな言葉を使います。	.48	.52	.47	
10	A. 私は他人がどう反応するかを見るために時々突拍子もないことをやりたくなります。	.48	.41	.37	
	B. 私はいつも普通にふるまいます。他人を驚かせたりうばいさせることには興味がありません。				
30	A. 他人をびっくりさせるような言動をする人は好きではありません。				
	B. 言動のすべてが予測できるような人にはうんざりします。	.47	.42	.37	BS
14	A. 私は軽い音楽よりもクラシック音楽の方が好きです。				
	B. 私はクラシック音楽よりも軽い音楽の方が好きです。	.43	.42	.56	
34	A. オートバイに乗る人は自分の命をそまつにする無謀な人だと思います。				
	B. オートバイに乗ってみたい。	.43	.45	.47	
18	A. 私は不規則で不協和音の多い現代音楽は嫌いです。				
	B. 私は不規則で不協和音の多い現代音楽を聞くのが好きです。	.42	.49	.34	
37	A. 私は家の中で過ごすのが好きです。				
	B. 私は家の中に居ると退屈してしまいます。	.33	.27	.48	BS
Boredom Susceptibility (BS)					
4	A. 私はいつも同じ人に会っているとうんざりします。	.66	.80	.72	BS
	B. 私はいつも同じ人に会っていても楽しく過ごすことができます。				
24	A. 内容が分かっているような映画や演劇は見たくありません。	.53	.47	.45	BS
	B. 内容が分かっているような映画や演劇でも気にせず見ます。				
8	A. 見たことのある映画を二度も見たくありません。	.46	.33	.62	BS
	B. 何度でも同じ映画を見ることができます。				
28	A. 身体的に魅力のある異性が好きです。	.46	.32	.43	
	B. 自分と価値感が同じ異性が好きです。				
12	A. 性的な関係がうまくいってればお互いに決して退屈しないと思います。				
	B. セックスの相手がいつも同じであればやがて退屈するのはあたりまえだと思います。	.43	.30	.40	
32	A. 結婚前のセックス体験は多い方がよい。	.42	.28	.31	
	B. セックス体験は結婚後の方がよい。				
16	A. 毎日決まった仕事でも楽しくできると思います。				
	B. 毎日決まっていな変化する仕事の方が楽しいと思います。	.37	.39	.23	
20	A. 活気のない人や退屈な人と一緒にいるのは耐えられません。	.28	.27	.32	BS
	B. どんな人とも話していれば何かおもしろい事があります。				

は Zuckerman et al. (1978) の Form V に採用されている項目に関して、下位尺度の名称が附記してある。

考 察

日本語版における4つの下位尺度の内容について、Zuckerman et al. (1978) の Form V における4つの下位尺度の内容と関連させながらみていく。

まず、TAS 尺度であるが、これは Table 2 に示した項目内容からも明らかなように、身体的に多少の危険を伴うスポーツ等の活動を好む傾向に関するものである。また、日本語版における TAS 尺度の 10 項目の内、8 項目は Form V における TAS 尺度項目に一致しており、項目内容において原版との一致がもっとも高い尺度である。

次に ES 尺度であるが、これは TAS 尺度とは異なり身体的にはあまり危険を伴わない活動を通してではあるが、新奇な経験を得ようとする傾向に関するものである。原版における Form V の ES 尺度項目と一致した項目は 10 項目中 4 項目であった。さらに、Form V の TAS 尺度からの項目が 2 項目含まれているが、これらの項目は我々のサンプルにおいては身体的危険がより低く評価された結果ではないかと推測される。また、日本版における ES 尺度には、マリファナ等の薬物の使用に関する項目が除外されている点が、内容面での大きな相違点となっている。

次に、Dis 尺度であるが、これは社会的抑制をとりはらって思いきり騒いだり、他人の目を気にすることなく自由に自己表現を行おうとする傾向に関連したものであると思われる。Form V の Dis 尺度項目と一致しているのは 1 項目のみであり、項目内容の面で最も不一致度が高い尺度である。日本語版の Dis 尺度の特徴の 1 つはギャンブルやセックスに関連した項目が除外されている点である。これは特に女性においてこれらの項目が独立した因子を形成したという事情にもとづく措置の結果である。さらに、概念的には Dis 尺度は、社会的抑制からの解放が中心となっているが、それはあくまでも社会的に容認された範囲内のもののようであり、容認の基準が西欧社会と異なっていることが、このような因子構造上の差異をもたらした可能性が考えられる。

最後に BS 尺度であるが、BS 因子に十分に高い負荷量を示した項目が少なく、8 項目がようやく基準に達した。Zuckerman (1971) の因子分析結果においてもこの因子の寄与率は他の諸因子に比べ低くなっている。BS 尺度の内容は、主に変化のないことに対する退屈感が中心になっている。8 項目中 4 項目は Form V の BS 尺度項目と一致している。主な相違点は日本語版においては、セックスに対する態度に関連した項目が関与している点である。

以上の様に、項目の一致という点に関しては、高い尺

Table 3
Test-Retest reliabilities of the Japanese
version of the Sensation-Seeking Scale

Scale	Male (N=98)	Female (N=96)	American ^{a)} Male & Female (N=65)
TAS	.86	.82	.94
ES	.75	.79	.89
Dis	.74	.74	.91
BS	.54	.48	.70
Total SSS	.87	.73	.94

Notes. Test-Retest interval was three months.

^{a)} Cited from Zuckerman (1979), Test-Retest interval was three weeks.

度と低い尺度が存在するが、本来その尺度が測定しようとしている概念内容に関しては、Zuckerman et al. (1978) の尺度と差がないように思われる。

調 査 2

目 的

日本語版 SSS の信頼性について再検査信頼性と内的整合性の観点から検討する。さらに、日本人学生サンプルにおける尺度得点の記述を行う。

方 法

被験者 男子大学生 412 名 (平均年齢 19.4 歳, *SD* 1.25) と女子大学生、女子短大生および、女子看護専門学校生 456 名 (平均年齢 19.5 歳, *SD* 2.14) の計 868 名である。ただし、再検査信頼性の推定の際には男子大学生 98 名 (平均年齢 19.1 歳, *SD* 0.96) と女子大学生および女子短大生 96 名 (平均年齢 19.6 歳, *SD* 0.56) を対象にした。

手続き 資料の収集は 1985 年 10 月から 1986 年 1 月にかけて行った。信頼性は、4つの下位尺度に関して再検査信頼性および内的整合性を検討した。再検査信頼性ではテスト-再テスト期間を 3 か月とし、2 時点における尺度得点の相関係数を求めた。また、内的整合性係数の算出には Kuder-Richardson の公式 20 (KR-20) を用いた。

結 果

Table 3 に 4 つの下位尺度および 4 つの下位尺度をまとめた全体尺度に関して、男女別に再検査信頼性係数を示した。Table 4 には同様に、KR-20 による内的整合性係数を示した。なお、Table 3, 4 には参考として Zuckerman (1979) が SSS Form V に関して報告している再検査信頼性係数と内的整合性係数を附記した。まず再検査信頼性に関しては、男女共各尺度の信頼性係数においてほぼ差がないように見受けられる。さらに、

Table 4
Internal consistencies of the Japanese version
of the Sensation-Seeking Scale

Scale	Male (N=412)	Female (N=456)	American ^{a)}	
			Male (N=97)	Female (N=122)
TAS	.67	.61	.77	.77
ES	.57	.50	.61	.61
Dis	.56	.47	.74	.76
BS	.29	.29	.57	.56
Total SSS	.75	.65	.84	.85

^{a)} Cited from Zuckerman (1979).

Table 5
Mean scores and SDs of the Japanese version
of the Sensation-Seeking Scale

Scale	Number of items	Mean(SD)	
		Male (N=412)	Female (N=456)
TAS	10	6.5(2.49)	5.7(2.34)
ES	10	4.4(2.19)	3.8(1.95)
Dis	10	7.1(2.14)	7.2(1.88)
BS	8	3.2(1.56)	2.2(1.40)
Total SSS	38	21.1(5.55)	18.9(4.56)

TAS, ES, Dis 尺度においてはいずれも .70 以上の十分な信頼性係数を得ているのに対して, BS 尺度の信頼性係数はやや低い。内的整合性に関しては, BS 尺度を除く全ての尺度において女子の整合性係数は男子に比べ低い傾向を示している。また, BS 尺度の整合性係数は他の尺度のものに比べ低い値を示している。

次に, Table 5 は日本人サンプルにおいて得られた 4 つの下位尺度得点および 4 尺度の得点を合計した全得点に関する平均値と標準偏差値を男女別に示したものである。得点の男女差に関しては, TAS ($t=4.87$, $df=866$, $p<.001$), ES ($t=4.26$, $df=866$, $p<.001$) および BS ($t=9.94$, $df=866$, $p<.001$) の各下位尺度において男子の得点が女子に比べ有意に高いことが示された。また, 全得点においても男子は女子に比べ有意に高い得点を示した ($t=6.40$, $df=866$, $p<.001$)。

Table 6 は各下位尺度得点間の相関を男女別に示したものである。これによれば, BS 尺度を除く各下位尺度は相互に適度な関連性を有していることが分かる。しかし BS 尺度と他の尺度の相関はほとんど認められない。そしてこれらの傾向は, 男女に共通している。

考 察

日本語版 SSS の信頼性に関しては, BS 尺度を除けば, ほぼ問題がないように思われる。BS 尺度において

Table 6
Pearson's correlation coefficients between
subscales of the Japanese version of
the Sensation-Seeking Scale

Scale	Male (N=412)	Female (N=456)
TAS×ES	.42**	.32**
TAS×Dis	.39**	.17**
TAS×BS	.03	.00
ES×Dis	.31**	.11*
ES×BS	-.03	.05
Dis×BS	.17**	.10*

** $p<.01$, * $p<.05$

は, 再検査信頼性, 内的整合性共, 他の尺度に比べ劣っていることが示された。特に, 内的整合性の低さが顕著であった。これは 1 つには BS 尺度の項目数が他の尺度に比べ少ないことが一因かもしれないが, それ以上に 4 つの下位尺度の中で因子の同定が最も困難であったことと密接に結びついているように思われる。BS 尺度に関しては, 因子の妥当性および信頼性に問題が残る尺度であり, 下位尺度としては, 実用上, 参考程度に止めておいた方がよいように考えられる。

次に SSS 得点の男女差に関して, 男子の得点が女子に比べ高いことが Zuckerman の Form V を用いた研究において報告されている (Ball, Farnil, & Wangenman, 1984; Ridgeway & Russel, 1980; Zuckerman et al, 1978)。しかし, 下位尺度得点の男女差に関しては一部異なった結果が報告されている。Zuckerman et al (1978) や Ridgeway & Russel (1980) は, TAS, Dis および BS 得点において男女差を見出ししているが, オーストラリア人のサンプルを用いた Ball et al. (1984) は我々と同様に TAS, ES, BS 尺度において男女差を見出ししている。このように, 細部においては不一致が見られるものの, 一般に男子の SSS 得点が女子に比べ高いという共通の傾向が認められる。このような男女差について, Zuckerman (1983, 1984) は sensation seeking の生物学的基礎との関連において論議しており, 性ホルモンが sensation seeking の性格特性形成に何らかの役割を演じている可能性を示唆している。しかし, Ball et al. (1984) は異なる年齢集団における性差の表れ方が国によって異なることを報告しており, 社会化の過程が男女により異なることが sensation seeking の性格特性形成の男女差をもたらした可能性も否定できない。

最後に, 各下位尺度得点間の相関に関する結果は BS 尺度は他の 3 つの尺度とは独立した尺度であることを示している。さらに BS 尺度を除く他の尺度間において有

意な相関が認められたが、相関の程度は Zuckerman et al. (1978) が Form V において見出したものに匹敵し、Form IV において得られた相関に比べて低いものとなっている。sensation seeking 特性を階層的構造を持ったものとして仮定すれば、これらの下位尺度は sensation seeking の下位概念を表わすものと考えることができ、ある程度の相関はむしろ好ましいものと思われる。

結 論

Sensation-Seeking Scale は主に 4 因子構造を持っていることは、様々なサンプルを用いた研究において確かめられている (Ball, Farnil, & Wangenman, 1983; Stewart & MacGriffith, 1975; Zuckerman et al., 1978)。日本語版 SSS の作成もこれらの 4 つの因子を想定して行われた。しかし、当初、Form IV を翻訳し項目を因子分析したところ、特に女子サンプルの結果においては 4 因子構造を確認することは困難であった。そこで不適切な項目の部分的な削除を行い、再度因子分析することにより概念的には Zuckerman 等のものとはほぼ等価な 4 つの因子を抽出することができた。この因子分析の結果にもとづき、独自に 4 つの下位尺度項目を選択し、尺度を構成した。このようにして作成された日本語版 SSS は Form IV の短縮版である Form V と対応するものである。しかし、Form V における下位尺度項目との対応は TAS 尺度を除けばかなり低く、日本語版 SSS における ES, Dis, BS の尺度項目の構成は独自なものとなっている。

尺度の信頼性に関しては、4 つの下位尺度の内、特に BS 尺度の内的整合性が低く、今後改良の余地を残す。特にこの尺度においては、適切な項目が少なく新たに項目を収集することから尺度構成を考え直す必要がある。

最後に、内容的妥当性にもとづく、このような下位尺度の分類が、理論的な観点からどのような意味を持つかに関しては、今後の検討課題である。

引 用 文 献

- Ball, I. L., Farnill, D., & Wangenman, J. 1983 Factorial invariance across sex of the Form V of the Sensation-Seeking Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 1156-1159.
- Ball, I. L., Farnill, D., & Wangenman, J. 1984 Sex and age differences in sensation seeking: Some national comparisons. *British Journal of Psychology*, **75**, 257-265.
- Farley, F. H. 1967 Social desirability in the Sensation-Seeking Scale. *Acta Psychologica*, **26**, 89-96.
- 大久保幸郎 1972 日本の学生における Sensation-Seeking Scale 得点の検討 日本心理学会第 36 回大会発表論文集, 434-435.
- Ridgeway, D., & Russel, J. A. 1980 Reliability and validity of the Sensation-Seeking Scale: Psychometric problems in Form V. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **48**, 662-664.
- Stewart, D. W., & MacGriffith, G. 1975 Factor analysis of Zuckerman's Sensation-Seeking Scale. *Psychological Reports*, **37**, 849-850.
- Zuckerman, M. 1971 Dimension of sensation seeking. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **36**, 45-52.
- Zuckerman, M. 1979 Sensation seeking: Beyond the optimal level of arousal. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Zuckerman, M. 1983 A biological theory of sensation seeking. In M. Zuckerman (Ed.), *Biological bases of sensation seeking, impulsivity, and anxiety*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 37-76.
- Zuckerman, M. 1984 Sensation seeking: A comparative approach to a human trait. *Behavioral and Brain Sciences*, **7**, 413-471.
- Zuckerman, M., Eysenck, S., & Eysenck, H. J. 1978 Sensation seeking in England and America: Cross-cultural, age, and sex comparisons. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**, 139-149.
- Zuckerman, M., Kolin, E. A., Price, L., & Zoob, I. 1964 Development of a Sensation-Seeking Scale. *Journal of Consulting Psychology*, **28**, 477-482.
- Zuckerman, M., & Link, K. 1968 Construct validity for the Sensation-Seeking Scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **32**, 420-426.

—1986. 4. 7. 受稿, 1986. 9. 20. 受理—